

「正信偈」をご一緒に学ばせていただきまして、今日は第四回目になります。初めにテキストの五頁から六頁の「普放無量無辺光」の前のところまで、ご一緒に拝読をさせていただきます。

帰命無量寿如来 南無不可思議光
生きとし生けるものを
喚（よ）び覚（さ）ましてやまない
無量寿如来に帰命し、
思いはかれない智慧のみ光に帰依（きえ）いたします。

法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所
その昔、あなた（阿弥陀）が
法蔵菩薩として道をもとめておられたとき、
世自在王仏という師におつかえし、

観見諸仏浄土因 国土人天之善悪
あらゆるみ仏の世界の成り立つ原因と、
その国土の人間と天人の
善し悪しのすがたをみきわめて、

建立無上殊勝願 超発希有大弘誓
すべての人の依りどころとなる浄（きよ）らかなる
国土を建てようと、この上なく素晴らしい願いを打ち立てられ、
みな共に目覚めようとの、またとない誓いをおこされました。

五劫思惟之撰取 重誓名聲聞十方
五劫という長い時をかけ、思索を深める中から根本の願いを
選び取って、み名（名号）にあらわされ、重ねて誓われました。
どうかこのみ名とそのいわれがよく聞かれ、
あまねく十方の世界にひびきわたりますように、と。

前にも申し上げたことがあると思いますが、私たちは普通、色々と教えてくださる年上の方を先輩と呼びます。しかしそれだけではなく、歳の若い先輩もたくさんおられます。だんだん歳を重ねていきまして、私も老人の一人になったのでありますが、だんだん年上の先輩が少なくなっていくということがございます。よき人のおおせをいただくということは本当に有難いことで、歳の若い先輩にたくさん出遇わせていただくということがございます。

歳を取るということが身体的には、また頭脳的には物忘れが多くなるという面がございまして、それは否定することはできません。それだけに人と出遇い、その人を通して教えに出遇っていく。そういう出遇うということの実感の深さが教えられてくる。今、私、杖をついて歩きました。若い時はいらなかったのですよ。ちょっと体調を壊しまして、杖を借りて三本足になったわけです。今までは歩けるということが当たり前だと思っていたけれど、不自由になってみて身に沁みて感ずる

ということがあるわけです。感ずるということが、私は生きている、生かされていることの内容。豊かさであり、深さであると教えられます。

親鸞聖人のお言葉の中に、「何事もみな忘れて候う」という言葉があります。よくご存知の方にどうぞ尋ねてください、という言葉であります。決して親鸞聖人が衰えたとは思えないのであります。親鸞聖人のご自身の感覚から言えば、歳を取ったなあというそういうことがおありになるのでありましょう。そういうことが、私は大変大事なことであると思います。

「いつまでも俺は元気だ！」という生き方もあるかもしれないけれども、しかし自然に生きておるといことは、歳も取り、物忘れが多くなる。そういう事実を受けて、「今 現に ここに この身が 生きている」。厳しい環境だと言わなきゃならないような社会状況であります。人間が生きておるといことにおいては厳しい環境だと思われてなりません。

だから「今 現に」といことはそういう自然状況、社会状況、人間の生きる現実ということ踏まえて、「ここに」とい。「ここに この身」、私自身が生きているという。そういう「今 現に ここに この身が生きておる」といことを、本当に受け止めて生きる。そしていただいた命、これも一回性の命であります。今日という日は、二度とないといことです。この身を生きるということも二度とない人生。命を生かされて生きていことであります。

そういう意味で私は、出遇い続けていく人生だと思います。いつも新しい出遇いに満ちている。歳を取ってくるとどうしても衰えて閉鎖的になるという感情が強くなる面もあるかも知りません。しかし、老いば老いたところに出遇いがある。今まで気付かなかったことに気付いていくとい「実感の深さ」。一回性の人生を十分に、存分に燃焼し尽くしていくことのできる、そういう人生が開かれておるのだいことを教えられつつあるのであります。

人間の意識はともすれば停滞し、あぐらをかくといことがあるかも知りませんが、命それ自身は一瞬も休むことなく動いている。心臓、血管、脈拍、呼吸、そういうもの。日常生活の中ではそういうことを概ね忘れておりますけれど、やっぱり生きておる、生かされておる。この身の事実から言えば、現在進行形です。生き続けておると。

そして、今が旬。普通は少年時代とかね。筈にも旬の時期がある。私は親鸞聖人の教えを聞かせていただいて、念仏を教えられて、今が旬だいことを教えられます。だから歳を取ったから旬でなくなるとい、そんな話じゃなくてね。その命が生きておるといことが旬だいことじゃありませんか。もしそのことを忘れると、どうしても回顧的になるのです。回顧することは大事ですよ。昔は良かったと、そういう回想型。回顧的になるわけです。回想は回想で意味があり大事であります。

これは金子大栄先生でしたか、「二度と経験をし直すことはできない。しかし、憶い起こすことのできる」といことをおっしゃっておられました。憶い起こすことにおいて吟味し、確かめる。そして改めていただく。若い時には迷ったり色々あったりしたけれども、その時代があって今の生活がある。存在の意味が改めて本当に受け止められる。現在が救われる、目覚めるといことは過去のすべてが意味を持ってくるといことでもあります。そう言い切れるのではないのでしょうか。何故ならば、かけがえのない人間に生まれたといことはこういことであつたかとい、「感動」ですね。深い大いなる感動を味わうといことは、それまでの歩みのすべてが出遇しめるべき意味を持っている。だから私は親鸞聖人が二十九歳の時に、感動をもって

しかるに愚禿釈（ぐとくしゃく）の鸞（らん）、建仁辛（けんになかのと）の酉（とり）の曆（れき）、雑行（ぞうぎょう）を棄（す）てて本願に帰す

（真宗聖典三九九頁）

と言った時、それまでの雑行の生活が本願に帰するとい意味を持って、大事な人生をいただいた

と。これまでの自力の行に頼らずとも、本願に帰してあらゆる人々と共に、存分に果たし遂げ尽くして生きていくことができるという、そういう本願に生きる大地ですね。親鸞は本願の名を「大地のごとし」（真宗聖典二〇二頁）という言葉が引用されております。大地というところには、自分も立つ一人であるが、ありとあらゆる人々が共に立つことのできる、共に生かされて生きている、そういう大地を見出したという、そういう大いなる意味があると言います。

私たちが今、いただいております「正信偈」の偈というのは歌という、偈頌とも言われ、感動を表すわけです。インドの言葉ではガータという言葉ですけれども。その感動というのは人間の個人的な欲望を満足させる感動ではありません。人生において人間が本当に出遇うべき、兼ねて久しく人間の苦悩を貫いて求めて止まなかった真実の教え、真実の仏法に出遇った感動です。そうであるが故に、人間の上に起こってくるどのような苦悩も、悩みも不安も、その出遇った仏法に問い尋ねていくことができる。そこに除外されるものがない。この身の上に起こってくる問題は、この身の上ということは歴史社会。除外されるものがない。

私たちは除外するということが結構好きなのです。人間の煩悩の深い所にね、除外して楽しむという楽しみがあるのです。人間の煩悩というのは深いですね。意識に表れるのと無意識の中ではたらいっているそういう煩悩がありますけど。そういう無意識の人間の生きるという根っ子の根っ子まで。一番深いところまで、迷いも目覚めのはたらきも一番深いところまで徹底する。

先々月、第三回の時、「五劫思惟之撰取」という、何故五劫もの間、思惟して、それを本願として表され、念仏信心として表されているのか。五劫思惟ということについて前回は学ばせていただいたのであります。それは前回も申し上げましたように、この五劫というのはいわば永遠の時をかけるという。法蔵菩薩があらゆる衆生を救い遂げようと、そういう大きな深い願いを、世自在王仏という仏に出遇われて、その中で国を棄て、王を捐（す）てて、一人の沙門となって道を求める人となって、本願を起こされたのであります。五劫という、いわば永遠に等しいような時をかけて本願を起こされて、そしてそれを思惟されていく。そこには人間の抱えておる問題の深さ、重さ。一筋縄ではいかないような人間。つぶさには私自身の生き様。五劫思惟という時をかけて、本願を起こしてくださったという、大きな意味があるかと思えます。

これは前にもお話させていただいた記憶がありますが、蓮如上人に出遇われた赤尾の道宗という方がおりました。道宗は四十八本の割木の上に寝たという逸話が伝えられております。割木の上には寝られたものじゃないですよ。鉋で割って棘がいっぱい出ておりますから。その四十八本の割木の上に寝たということは、四十八の本願の教えを割木になぞらえて、本願のお心を一時も忘れることのないようにとのことです。それを社会的な版画家の棟方志功さんが感動して、その姿を版画に書いておられるのです。それが道宗寺にあるわけです。これは蓮如上人を通して、道宗さんの凄まじいまでの本願に出遇ったという感動だと思います。しかし、赤尾の道宗であろうと、あぐらをかいてしまうということがある。

親鸞聖人は仏説の正像末の史観ということを非常に大事にしておられます。正法五百年、像法千年、末法万年。釈尊在世の時、滅後五百年でしたか。教えも行うということも、み名を証するということが盛んであるけれども、だんだん衰えていくと。像法千年になると、教えに生きるというそういうことが真似事になって、証することがなくなっていく。末法万年になるとただ教えだけ残って行、証がないと。私は、これは大変鋭い人間の営みというものを表していると思えます。身近な生活史の中で言えば、教えに出遇った時はやっとならぬかというそういう喜びが尽きないということが、本当に有難いということがありますが、だんだんそれに慣れてくるといつの間にかそこにあぐらをかいてしまう。

無戒名字の比丘ということ親鸞聖人は化身土巻に取り上げておられますけれども、戒律を保た

ない、形ばかりの僧侶という問題を取り上げた。しかし末法の時代においてはそれが非常に大事な意味があるということ提起しておると思います。私は、現実生きるという。そしてそれは、時代の進化とか色んなものが進んでくる中で、ついつい人間が教えにあぐらをかいてですね、いわゆる宗教生活というようなものが頹落（たいらく）していくと、衰えていくという問題です。人間存在にはそういう非常に深く重い問題があるわけです。

罪悪深重という言葉が『歎異抄』の第一章に言われております。罪悪深重ということは、見えて感じられるという意識の世界だけの問題ではなく、無意識の気が付かないところの問題ということがあると思います。現代の文明社会はやはりそういう問題を抱えておりますよね。核開発、核エネルギーという問題は文明の歴史から言えば画期的な発展というのでしょうか。それによって人間を一挙に、何十万何百万と殺すという。またその為に核爆弾を作っておる。保有しているということは大いなる闇ですよね。暗黒ですよね。だけどそれを罪悪だと言って指摘される方は極めて少ないです。そういうところは私は人間社会でいよいよ人間はこれからののだなという、そういう問題の深重さを感じます。親鸞聖人は阿弥陀の本願に遇って、

仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり

（『歎異抄』第九章）

という言葉があります。仏かねてしろしめしてということは、仏様の量り知れない大なる智慧。大悲の智慧ですね。人間存在が本当に煩惱具足である。罪悪深重であるということは、かねてしろしめしてという。自力の計らいでは間に合わない。どんなに悪をやめて善人になろうとしても、それが間に合わない。つぶさに言えば、生き物を殺して、命をいただいて、生きているわけでしょう。人様に迷惑をかけずしては、世話にならずしては生きられない。そういう存在自身のかねて具えている問題性の深さですね。そのことを忘れて善人意識に走ると、自分を見失い、人を見失うと。

荒っぽい表現をしますと、戦争というのは人を殺して平和を実現しようというわけでしょう。根本的におかしいですよね。人を殺して。殺される命が私であり、家族であり、親であり、兄弟であるということは免れません。けどどうしても都合の良いように考えてしまうわけですね。人間が人間として見えなくなる。自分が人間として見えなくなる。そういう大きな闇が善人意識の所にはあるかと教えられますが、いかがでしょうか。

だから一人ひとりの生きているという問題はどれ程深い重い問題を抱えておるか分からない。そこに五劫思惟ということがあり、兆載永劫の思惟という非常に深い意味があるのであります。他人事じゃないのですよ。単なる物語じゃないのですよ。現代の言葉で言うならば、一存的な、現実存在ですね。そういう問題、人間存在の抱えておる問題を明らかに教えてくださると。

だから五劫思惟ということが、私の生き方の中に関わっているということに気付くということは並大抵じゃありませんよ。それはどうしても自分中心でこれだけ自分が考えて苦労してやってきたのというふうに分かたぬ自分の経験や体験や知識や教養やそういったものを中心にしか考えられないというふうな在り方の中で、私が生きているということは量り知れない命のご苦労をかけ、お世話をいただき、生かされて生きておると。そこに仏法の仏道の伝統として支えられ、脈々と生きている本願のおみのに遇うならば、この身が目覚めなければ仏は仏とならないというそういう誓いを、この身にかけてくださっておると。

それは並大抵のことではありません。そこにはどうしても人間は功利性とか、結果に振り回されてしまう。苦労して儲かるかと、うまくいくか、幸せになるかならないかと。そういう功利性ね。振り回されてしまうことが切実にあるわけ。そういう問題が切実にあるからこそ功利性に振り回されない、生きておるそのことが無条件に尊い。

曾我先生はよく尊いという言葉で尊（たつと）いという言葉で表現されて。尊（たつと）い命なのですという。そういうことに気付いていく、目覚めていくということは切実なやっぱり火急の問題ですね。一大事と言われる。何故かならば、そのことに気が付かないと、枝葉末節なことに振り回されてしまうからですね。荒っぽい表現をすれば金の奴隷になる。色んな世間的な価値の奴隷になってしまう。むざむざと命が追われ、そしてしのぎを削るという形の中で継ぎ足されてですね、空しく終わってしまわないかという空過の問題がある。人間にとって一番、深刻な辛い問題は空過するという。空しく過ぐるということではないでしょうか。

今の時代において人間が生きるということは、私は空過の問題というのは深刻な問題だろうと思いますね。あまり良い例ではありませんが、良い大学へ入って、良い就職をするために苦勞して苦勞して、遊びもやめて勉強してきたのに、入ったはいいがすぐに首切られたとかね。色んな状況があります。何の為に苦勞してきたのだろうということがあります。一人ひとりの人生において何の為に私は生きてきたのであろうかと言う時に、空しかったということであるならばとてもたまらないですね。

やはりそういう空しさということがいっぱいある中でこの今、現にここに生きておるこの身が、生かされて生きておるということは、並大抵のことではない、不可思議の事実であったと。尊い事実であったと、こう受け取られるならば、現実を本当に受け止めて生きていけるわけです。そこでは罪悪深重だからつまらんなんてそんな話じゃなくて、罪悪深重の身であればこそ、この身にかけられておる大悲の深さに感動せずにはおれないという。

そういう闇の深さを知るということは、光の明るさなのですよ。光の明るさなくして闇の深さはわかりません。だいたい闇だとは思わない。光深くして闇いよいよ深し。その時、闇いよいよ深しという時には、光に遇った感動です。光に触れて、闇が深いという。そういう出遇いです。だから出遇いということが本当に深いと思います。

五劫思惟之攝取ということ、やっぱりこの身にかけられておるという。十方衆生にかけられておるその願が、同時にこの身にかけられておるのだという。そのことを親鸞聖人は、自らの名のりをもって、教えてくださった。これはこの前にお話しさせていただいたと思いますが、

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを

（『歎異抄』第十八条）

そのひとえに親鸞一人がためなりけりという、そういう受用、受け止めですね。この親鸞の言葉を通してね、私は大悲本願内存在である。私たちの一人ひとりが外に本願があるのではなくて、本願の中に既に願われてはたらかれて生きていた。そのことに気が付かなかった。あるいは外に見ていた。しかしこの親鸞に出遇って、つぶさにこの言葉に教えられると、五劫思惟の本願の中にあつたという。大変なことですね。それを私たちが悩んだり苦しんだり迷ったりすることも実に深い意味があるのであります。その迷いや苦しみや煩惱をご縁としてあなた自身の存在が仏道の大きく豊かな歴史の中で生かされて生きておる存在である。

あなたが目覚めなければ阿弥陀は阿弥陀とならないというそういう深い願いのかけられた身を生きておるのであります。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、という言葉が大変な言葉であって、そくばくの業をとすることは、私は本当に親鸞自身がそういうそくばくの業をもちける身と。若干というわずかばかりのという意味じゃありません。量り知れない、人間があれこれと数えることが出来ない程。いつ何をするかわからない。

これは前回秋草さんの言葉で、戦争でいよいよ切羽詰まった時に、地獄の現実にあつて、本当に

生きなければならない。五十八歳の時ですよ。捕虜になるくらいなら自決せよと。自ら弾を撃ったり、腹を切ったりして死ぬと教えられていた中で、自決して帰って親が喜ぶだろうか。生きて帰るといふ決意をして、それで傷から湧いている蛆虫を食べたのですよね。そういう生きる力が湧いてきたわけです。生きようとするそういう生命力がね、肉体の命から湧いてくるというのは大変な力です。これは秋草さんだけにある力かということ、そうじゃない。一人ひとりの中にそういう力がはたらいているのでしょうか。縁を待って出てくる、湧き出てくる。縁を待たずに殺し合うことがあるわけですよ。多くの場合は殺すということが多いわけですよ。

自殺をなさる方が非常に多いですが、それは悲しい現実であります。しかし、今日は死ぬのをやめよう、明日にしよう、明後日にしよう。優柔不断なのだけども。だけどそれがね、生きるということに出会うというご縁になるということが事実としてあるのであります。だから人間の優柔不断というのは決め方はね、絶対的ではありません。人間の持った、人間の付けた価値観が大きな力をもって、ともすれば絶対化されるということが、現にあるのですよ。だけど本願の教えに出遇ってみると、優柔不断でぶつかったということが、現にあるのですよ。人生というのは深い、人間の浅い価値観では量れない。清澤先生は、妙用（みょうゆう）ということをおっしゃいましたが、現実の命はそういう人間の解釈とか説明とか計算を超えたですね、大いなる命のはたらきの中にある存在であると教えられます。そのことが非常に大事なわけです。

今日はですね、それを受けまして、「五劫思惟之撰取」ということを受けて「重誓妙声聞十方」という。重ねて誓うらくば、妙声十方に聞こえんと、と。その言葉に展開しておるのであります。そこにはですね、重ねて誓うらくはというこれは、この「正信偈」のこの部分は『大無量寿経』によって歌を作られておるのでございます。

依経分というのは「帰命無量寿如来」から。依釈分というのは「印度西天之論家」からですね。龍樹菩薩から天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空という七高僧。この依経分は、『大無量寿経』に貫かれておる本願念仏の精神を歌い上げられておる。「正信偈」はですね、その浄土真宗のおみのりの要、肝要を親鸞聖人が出遇うことができたという感動を込めて讃嘆、讃えられておるといふそういう歌でありまして、それも『教行信証』の行巻の最後に歌われている。行巻というのは念仏が普く十方の人々に明らかにされておる普遍なる大道である念仏を讃えておると。普遍なる真実であり大道であるということをお讃えられた。その伝統を受けて、その中で「正信念仏偈」を歌われておるといふことは非常に大事な意味があるかと思えます。その「正信偈」の中で、本願の起こされたいわれというものを讃えられて、そして五劫思惟の間、思惟し、撰取して、根本の願いを選び取って、そして重ねて誓うらくは、妙声十方に聞こえんと、と。

重ねて誓うらくは、妙声十方に聞こえんと、と。これを歌われた偈はですね、「三誓偈」あるいは「重誓偈」と言われておりまして、『大無量寿経』の中に、阿弥陀の本願、四十八願を説かれて、その中の大事な肝要のことを三つの誓いとして誓われたと。本願の中の大事なことを重ねて誓われると。よくよく苦悩の深い悩みの多い人間の上に本願が実現するということをお讃えられて誓われた。誓いということはそこに命をかけるということですね。

法蔵の命をかける。命をかけるということはそれが実現しなければ法蔵は阿弥陀とはならないというそういう誓いです。非常に苦悩の深い人間を救い遂げなければやまないというそういう誓いですね。この「三誓偈」は、お手元の勤行集の八十九頁。本願の四十八願を説かれて、一切衆生十方の衆生が救われる道ということをお説かれて、その後に「我建超世願 必至無上道 斯願不満足 誓不成正覚」、これが第一の誓いです。

我、超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、この願満足せずは、誓う、正覚を成らじ。

(真宗聖典二十五頁)

一番初めの第一の誓いはですね、この四十八願が満足する、そういうことを誓われている、これが第一の満願の誓いでありませぬ。二番目がですね、

我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟（すく）わずは、誓う、正覺を成らじ。

(同)

という誓いませぬ。これは大施主となろうというそういう誓いませぬ。大施主となろうというのは、貧しさに極まっておる貧苦を濟わんという。曾我先生の言葉の中にこの貧苦は物質的だけじゃなくして精神的な貧苦もあると。物質的に貧しいということも厳しいですが、精神的な貧苦も厳しいませぬ。比較はできませんけれども、もっと厳しいかもしれませんね。物質的な貧苦はある意味では正直かも知れませんね。精神的な貧苦は気付かないうちに大悪を犯してしまうという問題がございますね。だから精神的な貧苦ということに今あまり気付いていないかもしれませんね。核を持たなければ平和は実現しないなんてことは精神的な貧苦そのものじゃないですか。だけどそのことを正面切って言うとお前馬鹿かと言われかねませぬね。何を考えておるのかというような。非常に深い問題ませぬ。それから三番目が

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。

(同)

という誓いませぬ。名声というのは南無阿彌陀仏の念仏です、名号。そして名号の意味、はたらき。それが十方に聞こえんというそういう誓いませぬ。中でも名声が十方に聞こえるということが大事であります。これね、ずばり申し上げますとね、私たちが今日ここにこうして聴聞をさせていただくということは名声が私たちに響いてきた、伝えられてきたという事実立っているのです。名声に遇わなければ、ここにはおりませぬ。それ程大事な深い重い意味が込められておるのであります。

貧苦を濟うということもね、非常に大きな課題でしょ。人間として教養もあり、立派なものだと思っておったらとんでもないと。本願の教え、仏の智慧に遇うと、清沢先生がね、相対有限というのは相対的であって、どっこいどっこいだと。限りがあるということです。どんなに無限の能力のあるようなことを言ったとしても人間でありますという位置に立つと相対有限であると。絶対ということは相対を超えているわけませぬ。無限なるはたらきです。

ですから絶対無限の妙用。如来のはたらき。絶対無限のはたらきに遇って、相対有限であったということに気が付くわけです。いかに自力を尽くしてもそれは限りのあるものであったということに気が付くわけです。ある人には親切にするけれども、他の人には親切できないという。事によっては酷いことをするというそういうことが、絶対無限の如来のはたらきに触れると、相対有限の姿に気付かされると、目覚まされるのでませぬ。

絶対無限のはたらきは相対有限を包んではたらく。だからといって、相対有限が絶対無限であるとは言えないと。あくまでも絶対無限のはたらきの中に、妙用に触れて、相対有限であるということを知らされる。煩惱具足の身であると、罪惡深重の身であるということを知らされるということです。無上殊勝の願ということを、この上もなく尊いすべての人々を濟い遂げようというはたらき。これは絶対無限のはたらきませぬ。それをかけられればこそ、相対有限の罪惡深重の煩惱具足の身であると、その身が絶対無限の本願に願われて生かされてあるという。

相対有限ということは絶対無限の中にしかないわけでしょ。それはやはり私たちが求道心、聞法するという身の実事に出遇い、知らされる、自覚するということにおいて、絶対無限の妙用が教えられるということがあると思うのであります。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんという絶対無限の阿彌陀の本願の名のりである名声、名号が十方ということは十方の一切の衆生に聞こえる。聞こえるということは届いてませぬ、そしてそれが信ぜられるというところに本当に本願

の仏道に生きる身となるというそういう大事な意味があるかと思えます。

名声という言葉で言われているのも名は名のりであって、本願のおこころを南無阿弥陀仏の名に表し、そしてそれが名のられる所に声となって、私たちが念仏申すことができる。そこにその意義、意味がですね、この煩惱具足の身をこそ助け遂げようと思い立ってくださっておる本願であり念仏であるというそういう意味を聞き取ることができる。名声十方に超えんということは非常に大事な意味があります。

まあ私事で恐縮ですが、私はこの「正信偈」をいただきながらこの言葉を思うとね、私は四国の香川県の生まれであります。家の宗教は真言宗なのですが、高校二年生の時に念仏の教えに生きておられる田中照海という先生から『歎異抄』のお話を聞かせていただいて、そういうことが大事なお縁となりました。また高校一年生の時の先生が、君たち本当に大事なものを読むということが大事だぞというね。倉田百三の『出家とその弟子』とか、『愛と認識との出発』とかそういうものをね、一時間かけて。今の親なら文句いうかもしれません。先生、受験の大事なことを教えてくれないで青春時代に苦悩の深い時代にこういう本を読みなさいって一時間かけて言う。私はその一時間が大変有難かった。だからそういうことがもう名声十方に聞こえんというのはね、聞こえているのですよ。絵空事の話ではないのですよ。そのことをね、私は皆様方と一緒に確認したいというふうに思うのであります。

やっぱりそこに念仏者のおられるところね。やっぱりその方自身が名声を聞いておられるわけですよ。聞かれることにおいて、伝わっていくということがあるわけです。だから名声十方に聞こえんというようなことは、重ねて誓うらくはという。そのことがなかったら、自分が出遇うということがあつたらうかという。だから重ねて誓うらくはという言葉が非常に私は重いし大事だと思うのです。よくよく深い誓いであると。

だからそこに親鸞は、弥陀の五劫思惟をよくよく案ずればというそういう言葉がね、よくよくいただくと、この身が救われなければ、目覚めなければ、仏は仏とはならないというそういう。阿弥陀は阿弥陀とはならないというそういう誓いがこの身にかけて。そこに本願念仏が伝えられて私にまで呼びかけられてきたのであります。そういう生きた事実。真実のおみのりのはたらく事実に立って親鸞聖人が遇い難くして遇うことができたという感動を込めて、仏道の讃嘆ですね。本当に讃えることができるというそういう歌として「正信偈」を歌われていると思えます。不十分ではあります。話のほうはこれで終わらせていただきます。